令和３年度第３回定例研　高木潤野先生の講演　　<感想・意見>まとめ

〇感想や意見

・場面緘黙は治せること、環境整備やアセスメント、医療につながること、本人の考えも聞くことが大切なことも分かった。本人が話せるようになりたいと思っているか話せないことで困っているかどうかを聞き話す練習をすることによって、少しずつ話せるようになるということもわかった。教育現場の理解が進んでいないこと、緘黙に関する理解が遅れていることは、当事者からの発信が少なく、問題行動も起きていないことに原因があることは今後の課題だと思った。

・新採の頃、選択性緘黙の女の子を担任しました。何となくその子とは他の友達を間に入れてコミュニケーションはできていましたが、「安心して話せる場を少しずつ増やすためのアプローチ」は全くやれませんでした。話せなくても困らないようにすることだけで精一杯で、それ以上もそれ以下も何もできずただ見守る１年間でした。２０年以上経ち、通級担当となり、選択性緘黙の子も通級の範囲の支援と言うことを知りました。高木先生の「安心して過ごすことができる状態」から「話すことに取り組む」所へのステップのつなげ方や一つ一つのアプローチの方法がわかりやすく、これなら自分も少しやれることがあると感じました。中でも、「担当の教師とは話せなくても良い。本人が話したい相手と学校で話すことが目標。」と言うことが、私たち教師がやりがちな間違いだと思いました。

・生徒が話さないから聞き出せない、仕方がないのではなく、指導する側が思いを聞き出す手立てを考えれば良いと言うお話や、生徒がどんな思いを抱え、何を望んでいるのか、だれと話したいと思っているのかが活動の原動力になるというお話が、ストンと心に入ってきました。思いを引き出すためには時間も策も必要ですが、子どもの声に耳を傾け、生徒自身と相談して目標を決めていこうと思います。こだまさんの２つの架空事例も、強く心に響きました。拝聴する中で、自分が関わっている生徒の姿が浮かんできて、自分の取り組みを見つめ直すことができました。

・緘黙について頭では分かっていても、話せない子を目の前にするとどうしたらよいのかわからなくなります。まずは、その子を知り、気持ちを理解することが大切なのだと分かりました。話したくても話せない「学校」という場において、個を大切にして改善していくのはとても難しく、時間のかかることだと思います。生活環境の変化にも対応していけるよう、長く指導に当たれるような態勢がとれるようになると良いと思います。

・場面緘黙の児童について、表れ、要因、アセスメント、指導方法等について、とても分かりやすかった。

・場面緘黙の子どもたちは、自分から困難さを発信しなかったり、周囲がそれを見取ることができなかったりした場合に、障害への具体的な手立てを講ずることない場合もある。ＬＤの子どもたちも、入学後１、２年を経過して、他の児童との差が顕著になってから対応をすることがある。もっと早い時期からの対応が必要だと考えるのだが。

・場面緘黙について、エビデンスのある具体的な指導が必要とのことである。ＬＤ等の子どもたちへの通級指導も、このことを大切にしている。そのため、子どもの実態に合わせて、自立活動の項目を指導するようにしている。ただ、その場合、どのようなエビデンスのある指導をすればよいのかがなかなか分からない。

・場面緘黙の指導では、第１段階として、安心できる環境で心と体の元気を整え、それを土台にして第２段階で話す指導をしていくとのことである。ＬＤ等の指導も同様だと思う。自分を自由に出せて、それを受け入れてもらえる環境でないと、自らの課題に向かって学ぶ意欲は出ないと思う。第

１段階を大切にしていきたい。

・クラスの中でお話ができないと担任としては焦ってしまい、なんとか話をさせたい、意思表示をさせたい、と思ってしまいます。担当者、こども、保護者が同じ長期的目標をもって取り組んでいることを担任がもっと知る機会がほしいと思います。高木先生のお話を担任の先生が理解してくださっていると支援がしやすくなると感じました。

・まずは安心して過ごせる環境を整えることが大事で、そのためには学校を休むこともありえるというお話を聞くと、今までに出会ってきた緘黙のお子さんたちにずいぶんプレッシャーをかけてきてしまったのだなと思います。

・担任は本人のプレッシャーにならない場所や時間を整えて話を聞いてあげることは現実的に難しいので、じっくり話を聞くことができるのが通級指導教室の担当の強みです。安心できる場所にしてあげることで本人が自分の望む姿になれるようにさらに勉強していきたいと思います。

・幼児さんで、緘黙のお子さんを担当したときに、ことばを使わない遊びや、〇×クイズなどを行い、ことばの教室は、無理に話さなくても良い、安心して過ごせる場所となるように　心がけていました。緘黙ネットや資料などで、緘黙の子供の気持ちを読んだりしながら、対応していましたが、来ている本人の気持ちをしっかり分かろうとしていたかと反省しました。幼児さんでも、できる練習があったのではないか、と考えさせられました。緘黙についての講演は少ないので、とても勉強になりました。ありがとうございました。

・昨年度から、緘黙のお子さんを担当しています。今回のお話をうかがい、「相手の思いを正しく理解し、尊重すること」の大切さと難しさを改めて強く感じました。「臨床家のための場面緘黙改善プログラム」を見ながら、お話を聞かせていただきました。じっくり読んで、具体的な支援につなげていきたいと思います。ありがとうございました。

・場面緘黙は情緒障害なので、言語通級の対象ではないということで、相談なども受け入れることはなく、対応したことはなかったです。また、通級してきても話さない状態では指導ができず、緘黙症は難しい、と言われていたので、自分はこれまで、緘黙症について特に深く考えることはなかったです。でも、今回、高木先生のお話を伺えたことは自分にとってとても有意義でした。自分自身、幼少期に場面緘黙のような時期もあり、また、これまで周りにそういう同級生もいました。「話せない」というのは辛いですよね。個性が発揮できていない、というのもよく分かりました。そして、コミュニケーションが大切なこと、時間をかけることなど、先生のお話全部が心にしみました。また、本人の困り感に寄り添うということが、通級の基本と同じだなあと共感しました。２時間にわたるお話ありがとうございました。

・場面緘黙について事例をもとにお話していただけてとても分かりやすかったです。本人の気持ちを最優先して、スモールステップで目標を設定していくことが大切であることが分かりました。現在、３名の場面緘黙の子供たちがことばの教室に来ています。一人一人タイプが違うため、何が正解なのか分からず、手探りで指導にあたっていました。先生のおっしゃる通り、失敗したらどうしよう、間違えた対応だったらどうしよう、と指導に消極的になっていました。１年生の２名については、しゃべることを目的にしていません。場に慣れて安心して自分を思いっきり表現することを目的にしています。言葉を出すことはありませんが、ジェスチャーや表情、音で気持ちを表しています。焦って話させようとするのではなく、焦らずにゆったりとした気持ちで接していきたいです。３名のうち１名は６年生で、10月から通級を開始しました。中学に向けて時間が無いなかで、焦る気持ちが出てきてしまいますが、本人の気持ちを優先に、ゆったりとした気持ちで接したいと思います。

・段階をおって支援していけば、場面緘黙の子もことばが出せるようになっていく。ぜひ研修を深め、実践していきたいと思いました。ありがとうございました。
・場面緘黙は治らないもの、と思っていました。適切な対応により症状を改善できるなら、それは通級担当者が担う仕事だと思うので、対応の仕方を研修したいです。
・場面緘黙で苦しむ子の表面に見えている『話せない』という問題だけでなく、その背景に目を向け個に合う環境を整えていくことの大切さを学んだ。
・いわゆる『場に慣れにくい子』と言われる幼児を指導しているが、場面緘黙と重なる点が多い事を感じた。丁寧に見取りを行っていきたいと思った。
・場面緘黙の定義等、今まで聞いたことがない内容だったのでとても良かった。今後、ことばの教室としてクラス担任に場面緘黙について広く、周知していかなければならないと思った。
・場面緘黙の子に出会った中で、トイレの失敗をよくする子がいたが、年少・年中の時だったのでトイレの自立が遅れているだけだと思っていた。今回話を聞けて勉強になったので、子どもの気持ちにもっと寄り添って関わっていきたいと感じた。
・場面緘黙についての理解を通して、場面緘黙が情緒障害に分類されていること、情緒障害は通級による指導ができることが分かった。今年度、市の判定会議で、場面緘黙のお子さんを通級対象ではないとした事例があり、今後の支援について悩んでいた。市教委と話をし、情緒障害の通級指導について考えていく必要があるのではないかと思った。学校での対応の段階1に、「家庭での行動の問題が出なくて済む状態にする」とあった。自分は学校と家庭と行動の問題を分けて考えがちだが、つながっていると考え、学校と家庭とが連携して安心できる環境を作っていくことが大切であると思った。不安と恐怖の違いには、なるほどと思った。そして、その不安を具体的に分かりやすくする不安階層表は、学校でのケース会議等で、本人の思いを保護者と学校が共有し、合理的配慮につなげていくときに活用できると思った。家庭では話せるお子さんを、学校でも話せるようにしていくための中間のステップの作り方を人・場所・活動の組み合わせ方を変えるだけで、何通りもコミュニケーションの段階を作ることができるヒントをいただき、大変参考になり、支援者として一歩踏み出したいという思いになった。場面緘黙のお子さんは言葉にしないだけで思いはしっかり持っているということを改めて認識し、本人の思いを、時間をかけてじっくりくみ取ることが大切だと感じた。
・場面緘黙についての理解を深めることができました。「話す練習」をするにあたっての手順がわかりやすかったです。スモールステップで、いろいろな視点から想定されることを踏まえて選択肢を提示することによって、意思表示しやすくなると思いました。話せなくても、困っていないからいいというのではなく、本人がどういう気持ちを持っているのかを理解してあげることが大切だと思いました。「はなせるTV」を観たら、より具体的に関わり方がわかり、とても参考になりました。ありがとうございました。
・場面緘黙の研修は今まで受ける機会がなく(研修自体が少ない？)とても待ち望んでいた研修でした。場面緘黙のケースは少ないのですが、富士宮市では毎年 2～3 人の相談があります。ケースが少ないせいか緘黙について知らない人も多く、その子に関わる人が誤解をしていることがあります。例えば、園で話さないのは、園の対応が悪いと思っている保護者がいたり、園の職員も不適切な対応をしていたりする場合があります。そこで、子どもの対応も大事ですが、その子をとりまく大人に緘黙についての説明や支援についての話は丁寧に行うように心がけています。でも、難しさも感じていました。ですが、高木先生のお話を伺って、その子を取り巻く環境がいかに大事であるか、また、その子の思いを丁寧に聞き取ってあげることも大事であるということがよくわかりました。この丁寧に関わると

いう点については、場面緘黙だけではなく、例えば、吃音のある子どもや他にもつまずきを持っている子どもへの対応の仕方にも通じるものがあるように感じました。幼児の場合は、どうしても保護者に頼ることが多くなるので、改めて一人一人子どもの思いを大事にしてあげ、丁寧に関わっていこうと思いました。

・独学で緘黙の子への対応をしていましたが、講演を聞き、間違っていないことがわかり、安心しました。

・本校にも場面緘黙の児童がおり、運動会では日記に「みんなに迷惑をかけてしまう」、めあてには「話せるようになりたい」と書くことがあり、何とかしてあげたいと思っているところです。エクスポージャー法でサポートしたいと考えていたところなので、今回の講演がタイムリーでとても参考になりました。

・通級担当だからこそできることがあるので、子どもの思いに寄り添って支えていきたいと思います。

・場面緘黙についての講演は初めてだったので、とても興味深かったです。以前場面緘黙の子どもを担当したことがありますが、その時は話す場所の確保と環境調整しかできませんでした。もし、高木先生のお話をもっと早く聞いていたら、できることがまだあったかもしれないと思いました。緘黙の子に話す練習をしていくというのは、とても大変なことだと思いますが、先生が提案されている具体的な方法を行うことで、少しずつ話すことができるようになると思います。今まで緘黙の子は「自分の言葉」は持っていて、場面によって話すことが出来ないだけだから無理に話さなくてもいいという考えでしたが、先生のお話をうかがって、話す練習をするという視点を自分の中でもつことができました。とても貴重なお話でした。ありがとうございました。

・現在、緘黙児（年長）を担当しています。年中の途中から引っ越しを機に入級してきました。姉（小３）も緘黙児として通級（発達）しています。先生の講話や本が私のバイブルになっています。もっと早く先生のお話を聞いていたら、指導法も変わっていたかと。「場面緘黙サポートガイド」は読んでいましたが、勉強不足でした。ここまでの緘黙児は初めて担当したため、苦労の連続です。しかし、楽しく話す姿や笑顔を見ると、その場を拡げてあげたいと切に願います。現場の先生方のなかには、「話すときを待てばいいのでは」や、「特別扱いではないか」など、先生がお話していた通り、違う見方をしている場合も少なくありません。今後少しでも誤解が解けていってほしいと思います。

・昨年度、場面緘黙症のお子さんが、幼児ことばの教室に相談・入級しました。担当になった先生は、どのようにかかわり、指導を行っていけばよいのかを先生の本を購入し、医療や所属園の先生方と連携を取りながら、指導を行っています。定例研で、先生のお話を聞ける機会を心待ちにしていました。具体的な支援の方法がわからず、特に困っている様子はないから、話したくなったらそのうち話すだろうという考えなのか、できる限りの支援をしてあげたいと考えている通級の先生方との温度差を感じることがあります。場面緘黙症の子どもの支援だけではなく、周囲の方々に理解や支援を伝えていくことも、これからの課題であることを感じています。ありがとうございました。・講演の冒頭、治療のための取り組みがおろそかになっているという示唆にどきっとしました。本人が緘黙を個性と思っているか、改善したいと思っているのか、その思いが指導の原点だと感じました。治療のための指導ステップを考えていきたいと思います。

・場面緘黙の子への系統的な支援の方法が分かりました。本教室に通っている子は、最近筆談がスムーズに出来るときが増え、時折声を漏らして笑うときも見られるようになりました。来年度の指導に向けて、まずは本人の気持ちや目標を聞いてみようと思いました。もし話せるようになりたいという思いがあれば、今回の講演で学んだことを活かして、話す練習をしてみたいと思います。

・場面緘黙のお子さんを担当したことがありました。幼児期であったことと，園や家庭ではよく話すという情報を聞いていたため，教室で喋る事ができない事に執着せず，焦らずに発話以外の表出手段を使ってコミュニケーションを取ったりしていました。言語的な弱さや機能性構音障害もありましたので，発話を強要しない様に，いずれ話せる時にスムーズに練習が進むように，言語課題を工夫した記憶があります。幼児期の関わりから，保護者とも話しを重ねて，どういった場面で困るか，就学後に困りそうな場面はどうかなど，小学校にスムーズに情報提供ができたと思いました。今後は，先生から教えていただいた様に，目標を明確にして，段階的に練習を進められるように心得たいと思います。

・概論から具体論まで大変分かりやすくまとめられていて、とても参考になりました。さっそく、先生の講演で知った考え方を使って、気になっている場面緘黙の子の指導に着手してみたいと思っています。お話を聞いていると、登校拒否や渋りの子に対する指導とも共通点が多いと感じて、その点でも参考になりました。やはり「情緒」というくくりで捉えることができる子達だから当然なのかもしれませんね。また、今ＡＳＤの子に対して取り組んでいるトークンエコノミーも場面緘黙の子に対する取り組みと非常によく似ていることも参考になりました　先生の書かれた本も静言研から支給されているので、そちらもしっかり読んで、場面緘黙の子の指導の充実に努めていきたいと思います。
どうもありがとうございました。

・私も場面緘黙症の６年児童を昨年度２学期から担当しています。話すことを強制させてはいけないこと、自分自身が緘黙症の指導に自信が無いことを理由に治療的なかかわりはしていません。筆談・ゲーム・卓球やキャッチボール等の２人でできる運動等をして、意思表示や、心の解放に努めているだけです。

・今回の講演を聴いて、正直刺激を受けました。同時に、もうすぐ卒業してしまうという焦りも生じました。今更ですが、アセスメントをもう一度取り直すこと、本人の思いを聞き取ること。卒業までの最終的な目標（例えば、担任に「ありがとうございました。」を言う）を本人と決定し、それが達成できるための、段階的な目標を設定しようと思いました。

・本人に気持ちを確かめる大切さを感じました。

・話すことは必ず相手がいるので、誰と話せるようになりたいかという本人の思いを聞くことがとても大切であると思いました。エクスポージャーを行う課題を考える時に、不安段階表の活用、付箋に書いて子供に貼ってもらうことなど、本人がちょっと頑張ればできる課題を決めていく必要があるのだと思いました。子供の気持ちに寄り添っていきたいと思います。

・本人の話したい気持ちや、話したい相手がいること等が、モチベーションにつながっていくと思いました。

・先生が講演で伝えたい内容もよく分かりましたが、通級で実現することは難しいと思いました。

・昨年度、選択性緘黙と診断されていた生徒がいて、私も「話すか話さないかを選択してるの？」と思いました。場面緘黙という言葉の方がなじみがあったので、場面緘黙症が正式名称になるとの話には少々驚きました。 その生徒の中３の目標は、「高校進学にあたり自分で進路決定する。」でした。【段階１】は中２（半期のみ）で、【段階２】は中３で実施。受験には面接があるので、話す練習をしたかったのですが、まずは自分の意思を何かしらの方法で相手に伝える練習をしていきました。本人との相談の上でした。高木先生が綴っていることの大半がその生徒の状況に合致していたので、内容が手に取るように理解できました。「話す練習」を進める手順、エクスポージャーを成功させるには？は、たいへんわかりやすく、自分の指導支援を振り返ることにも有効でした。【場面緘黙になる背景にある様々な問題】は私も感じていたことでした。 本校の情緒学級に場面緘黙症に近い生徒が２人いるので、その学級担任にもこの講演内容を伝え、今できる支援を考え、共有しました。実際にやってみて成功した、との報告もありました。今回の内容は、場面緘黙症の生徒だけではなく、すべての生徒

に活用できると思っています。実践を進めていきます。ありがとうございました。
・緘黙のお子さんの場合には、より丁寧に本人の気持ちを理解することが必要だと分かりました。そして、高木先生がおっしゃっていた、「カウンセラーとは話せなくて良い」という言葉にハッとしました。自分と話してくれないとさみしく感じてしまうので、声を出させたくなってしまいますが、子どもの思いを優先し、寄り添って指導をしていこうと思います。
・以前より通級していた場面緘黙児（幼児）は、指導時間に姉が一緒にいると、より家庭的な雰囲気になるため、言葉が出来やすくなりました。しかし、ことばの表出は、ことばの教室から外へ広がることはありませんでした。講演を視聴させていただいて、その時にもう一歩踏み込んでできることがいっぱいあったのではないかと悔やまれました。
・以前、担当した１年生は、家で話せる相手（母、姉、友達一人）と通級教室でも話ができるようになることを目標に指導しました。その結果、担当者がいない通級教室で、３人と話すことができるようになりました。しかし、その後の進歩がないまま１年が終わってしまいました。今回の講演をお聞きし、私の実践には一番大事な本人の思いを聞くことが抜けていたことがわかりました。本人の思いを汲み取らず、母親と面談しながら担当が目標を決めていました。今回の講演内容と共に、紹介していただいた本を読み、適切な実践ができるように勉強していきたいです。
・今回の講演を全ての先生方に聞いてもらいたいと思いました。前記の児童は、緘動がなく学力も高かったため、在籍校は「しゃべらないだけで、他に問題はない。もっと大変な子がいる。」からと、３年生に進級するときに通級の対象にあげませんでした。今回のお話を聞き、その後が心配になりました。関係の先生に今回の講演内容を伝えたいと思いました。
・「障害は本人が困り感をもっているときに個性とは言えない」という言葉がズシンときました。少し前、場面緘黙のお子さんを受け持ちました。先生のお話とその子の様子、自分がしてきたことがよみがえってきました。子ども達と接しているときに、その子の個性だとかは考えてはいませんでしたが、そのような言葉を聞くたびにそうかそうかと思い込んできた自分がよくなかったなあと思いました。本人がどうしたいと思っているのかそのことに目を向けてそれが実現できるように支援の方法を工夫していきたいと思います。
・場面緘黙の現状について、４つの問題点が挙げられており、どれも「なるほど」と思うことばかりでした。自分も対応の指針にと様々書籍にあたって指導に取り入れていたつもりでしたが、肝心な「本人の思い」にどこまでアプローチして寄り添えていたか･･･。消極的な選択という言葉にはっとさせられ、今後の指導を見直すきっかけをいただきました。年度末に近づき、指導の回数も限られているが、残された１回１回で何ができるか再度考えてみたいと思いました。
・現在、場面緘黙の中・高学年女子を３人担当している。本人がどうなりたいと考えているのか、講演にあったアプローチの考え方を参考にしながら、児童に聞き取りを進めて今後の目指す方向性を探っていきたいです。
・高木先生もおっしゃっていたが、場面緘黙児童の対応についてはなかなか情報がありません。高木先生から様々な書籍を紹介していただいたのでそれをもとに理解を進めるとともに、今回のように研修の場が広がることを希望します。
・事例をあげて解説してくださり、子どもの姿を思い浮かべて聴くことができました。　現在、場面緘黙児童を担当しています。安心感をもてる関係つくり、思いを表出する方法探りに重点を置いてきましたが、講演をお聴きして、「中間」を作ることの大切さを知りました。確かに、家で母親と、クラスで仲良し友達と、等、複数回、確実に「できる」ことを設定できそうです。相談して本人の意思を確認しながら課題設定をし、前進していきたいと思います。ありがとうございました。
・緘黙症状が強いと指導内容について日々悩んでしまいます。成績も良く、家では話すため家族も困り感がないことから、現状維持で良いのかなと感じている部分もありました。しかし学校では親しく話せる友達もいない。困った時に相談ができず、体調不良になるほど悩んでしまう。そんな本人の表れをみていると、やはりそのままではいけないと感じます。先生の講演を聞くことで、話せるようにな

る可能性があることも分かり驚きました。生育歴をもう一度洗い出す必要性や、家族がどんな思いでその子の今や将来を考えているのか話してみようという気持ちになりました。緘黙症状について、もっと向き合ってみようと思います。

・具体的な取り組み方の提案をされていてわかりやすかった。児童の生育歴から再度見直してできることを取り組んでみたいと思う。「話せる子以上にその子の思いを丁寧に聴き取ってあげること」「話したくても話せない子というとらえ方でカウンセリングができないのは聴こうとしないから」の先生の言葉が心に残っています。

・ひとくちに「場面緘黙」というが、その定義・問題点、どう理解するかなど、基本的なところがわかった。

・早期から、予防的改善を、そして、適切かつ段階的な介入が必要であることがわかった。

・介入する支援者の力量が問われる内容であり、責任は重大である。

・コミュニケーションのとり方の工夫は、参考になった。

・本人と確認しながら、合意を築きながら指導を進める手法は、不登校児童への対応にも応用できると感じた。

・具体的な児童をイメージし、場面を想定しながら、聞くことができた。今の自分にとってタイムリーな内容であったため、ありがたかった。

・検査数値偏重の弊害について、たびたび口にされていた。大切であると感じた。

・日々指導しながら悩んでいたため、場面緘黙について、じっくり考えるいい機会になった。その子の思いをしっかり聴きとることが大事、本人がわかっていること、思っていること、考えていることはたくさんあるとわかっていることが大事、この二つを心にとめ子どもと向き合いたいと感じた。

・場面緘黙の児に対して、対応方法が分からず、問題を先送りにすることがあってはいけないと気づかされた。本人の気持ちに寄り添い、本人の望む形に近づけるよう、支援していくように心がけたい。

・場面緘黙を本人のみの問題として捉えず、その人を取り巻く環境に心を配り、安心で心地よいと感じられるように努力したい。本人に“話す”ことのメリットを最大限に感じ取ってもらえるような環境づくりをし、少しずつでも、確実に前に進めたらよい。

・話せない、という一側面だけを見てその人のことを決めつけるのではなく、丁寧なアセスメントを行い問題の本質を多面的に捉え、対処していきたい。

・とても詳しい資料をご用意してくださり、ありがとうございました。
今まで何人かの場面緘黙かと思われるお子さんにお会いしてきましたが、これと
いった指導もできず、そのうち終了としてしまっていたことが、とても申し訳なく、
恥ずかしく思いました。今後、お会いすることがあれば先生に教えていただいたことを参考に、少しでもお子さんや保護者と一緒に考えていけたらと思います。ありがとうございました。

・場面緘黙の子への支援の研修をあまり受けたことがなかったので、２段階のアプローチの考え方は、とてもわかりやすく勉強になりました。
不安段階表などを使ってしっかりアセスメントを行い、その子に合った合理的配慮をすることや課題を細分化し、スモールステップで進めていくこと、そして、その子の思いをしっかりと時間をかけて聴き取ることを実践していきたいと思います。

・場面緘黙について、事例（架空）をあげて解りやすく、いろいろな場面から本質に迫るお話でした。聞き手は、あせらずゆったりと構え、相手の思いを聞きとる事が大切ですね。大人になっても改善できる！明るい未来を感じました。

・幼少期からの関りによって、緘黙の症状の改善の仕方がちがうだけでなく、その子の人生も変わってしまうというところに、今のその子をしっかり見つめることの大事さと必要性をすごく感じました。

・何度なく集団でも過ごせるというのは、本質的な解決には何にもなっていないことを改めて教えて頂きました。

・その子が安心して本音を伝えたいと思えるような相手に、自分自身がなっていけたらいいなと思いま

した。
・ていねいで、整理されていて、現場の自分にも分かりやすかった。緘黙単独の症例ケースを通級の相談・指導で受け持ったことはなく、やはり、園や保護者の困り感として出てきにくいこと、本人の困り感がつかみにくいことにより、相談の対象になりにくいと感じる。
・幼児の時に、行動面や対人面での不安症の症状を呈し、多くを表出しない子は園訪問でいるが、段階を踏んだエクスポージャーの指導としての取り入れはなかなかやりきれない印象である。捉え方や関わり方のヒントをいただけたので、園と表れや関わり方の共有をしたい面もあった。本人の思いをしっかり聴けるセラピスト側の姿勢が大切であると改めて考えさせられた。
・「話せなくても、あまり困らずに学校生活を送ることができている」小４女子の「こだま」さんと同じような児童がいたことを思い出し、その子は今どうしているだろうかと気になった。その子は「中学生になったら話す」と言っていたそうだが…。「話さない」のではなく「話したくても話せない」状態の原因は何だったのだろうか？
・「場面緘黙」は治らないものではなく、適切な対応により症状を改善で　きる。「話せなくても困らない環境」だけだと、緘黙症状を長期化させることにつながりかねない。そのために、「段階的なエクスポージャー」により話せる場面を広げる方法が有効であるという指摘は、大変興味深かった。
・「話してくれない」「話ができない」と言われる「場面緘黙」の子に対して、「氷山モデルによる理解」は、「場面緘黙」を構造的に捉える上で、とても参考になると思った。特に、その中で自分自身反省させられたのが、緘黙症状の環境因子として挙げられている「教師が子どもの話を聞く時間を十分にとることができているか」ということである。これは、「場面緘黙」の子へのアセスメントに限らず、すべての子どもたちに対してのアセスメントとして肝に銘じていくべきことだと思った。
・学校での対応として、２段階のアプローチのうち、第１段階の「安心できる環境で、心と体の元気を蓄える段階」は、ユニバーサルデザインを基本としながら、「個別の最適化」（合理的配慮の検討）を図っていくことだと思うが、これについての具体的な手法が紹介されていて、とても参考になった。本人（保護者）の「何が負担になっているか」を把握し、一つ一つの困り感やニーズに対して「合理的な配慮」の具体を検討していく。こうした困り感やニーズに対する環境整備の「見える化」をすることで、本人（保護者）の負担はかなり減るのではないか、「子どもファースト」の考え方だと思った。
・第２段階の「話す練習に取り組み段階」では、「誰と」「どんな時に」話せるようになりたいかという目標を明確にする（本人が決める）ことで、それに向かったスモールステップの課題（「エクスポージャー課題）を提案できることがわかった。「人」「場所」「活動」を組み合わせて、また、意図的に組み替えて、少しずつハードルを上げていくことで本人の不安感を減らすことができると思った。
・講演の中で高木先生が度々指摘された「本人の意欲」「本人に確認す　る」ことに対して、「場面緘黙」の子とどのようにしたらコミュニケーションをとることができるのだろうかと思っていたが、「３－３　場面緘黙のある子とのコミュニケーション」という中で、「話せなくてもカウンセリングはできる」の内容を聴いて、なるほどと思った。「時間をかける」（ゆっくり話す)、「正しく理解するよう心掛ける」（必ず本人に確認する)、「質問の工夫をする」（曖昧な質問には答えづらい）の３視点と、その具体的方法はとても参考になった。
・10 年ほど前に緘黙の子どもと関わったが、一緒に絵を描いて打ち解けてきたこと、プレイルームでトランポリンをやったこと、楽しくて思わずしゃべりそうになり、あわてて口を押さえていたことを思い出した。彼女も本当は話したいと思っていたのだろうな、そういうことを聞いて目標を立て、できそうなことから練習していく必要があったのだなと思った。当時は安心して居られる場所づくりは意識していたが、本当は話したいと思っているという考えが指導する側になかったと思う。来年度通級に入る子の中に、緘黙の傾向のある子がいるというので、今回のお話を参考にしていきたい。
・場面緘黙の子には、２人で出会っています。
一人目は、私が中学校の通常級学級担任だった時の女子生徒です。幼稚園の時、鹿児島弁を馬鹿にされてから話さなかうなった子だと聞いていたので、国語の音読でもとばしていました。3 年間声を聞

きませんでした。不登校生徒を受け入れる市立の高校に進学し、２０歳の時、同級会で会いました。髪を茶髪にしておしゃべりをする別人になったその子に会いました。周りの子も「しゃべるようになったよ。」と言っていました。「環境が変わればしゃべるんだ。」と思いました。
二人目は、LD 等通級指導教室担当になって出会った女の子です。1 年の終わりから登校を渋り、2 年生は母親との別室登校をしていた子です。病院で「広汎性発達障害、場面緘黙」の診断を受けたその子を４～６年まで通級で見ました。支援学級にもいけず、通級だけに来る子でした。人がいるとトイレにもいけない子でした。場面緘黙の症状を直すという病院への入院まで考えていたけど、やめました。中学では、支援学級に席を置き、その子だけの部屋を用意してもらって卒業し、特色ある通信制の高校に進んだと聞きました。高木先生の話を聞いて、当時何ができただろうかと考えましたが難しいです。

・来年度、自閉症の診断があり、場面緘黙の子が入学してきます。教室には入れそうなので、担任と協力して、まずは「無理して話さないけど、居心地のよい環境づくり」をしていこうと思います。そのうえで当時自分の概念になかった「話そうとしないのではなく、話したいけど話せない」というところを理解し、まずは安心感を与えたいです。教室では声が出せなくても、１対１の通級では、安心して声がだせるようになるといいです。また、昔の私になかった「本人の気持ちをしっかり聞く（母親に聞いてもらう）」「どこで、だれとなら話せるか」という視点を持ちたいです。
・場面緘黙についてあまり知識がありませんでした。症状や支援等について知ることができてよかったです。本人の気持ちが落ち込まないようにと、逆に気を遣いすぎて何もしない環境（その時だけの居心地のよい環境）を考えていたような気がします。大人になったとき、仕事や社会でのコミュニケーションを考えたとき、少しずつ自己目標を立てて行動していくことの大切さを感じました。今、吃音の児童支援に悩んでいますが、将来のことを考えたときに、少し共通している部分もあったと感じています。
・以前緘黙のケースで、私も「こだまさんのケース会議」のような対応しかできませんでした。あの当時緘黙について知りたくても Amazon で本を見つけることしかできませんでした。今日のお話を当時聞けていたらとてもよかったのにと思いました。それくらい「目から鱗」のお話でした。とはいえ、アセスメントの内容やアプローチの仕方は他の困り感を持つお子さんと大きく違わず、緘黙と言うことでうろたえてきたような気がします。通級担当がエクスポージャーを行える関係になることはなかなか難しいと思いますが、先生のお話を聞いたと言うことはこれからの財産になります。ありがとうございました。来年度、緘黙症の子が入級することもあり、非常に興味を持って拝見させていただきました。
・その子だけでなく、保護者や学校とも連携を取りながら、
「なにについて困っているのか？学校が原因なのか？家庭なのか？・その子がどう思っているのか？」
など、その子に思いに寄り添った関わりをしたいです。
・まずは、通級の場が本人にとって安心して過ごせる場にして、「話しても良いかな」と思える段階までじっくり進めていこうと思います。大変勉強になりました。貴重な機会をありがとうございました。
・自分は、場面緘黙児童を通級で指導したことはありませんが、以前３年間通級指導教室に通っていて（現在は指導終了）いて、現在保健室登校になっている児童を養護教諭が出張で不在になる昼休みから５時間目に通級指導教室で預かったことがあります。その児童については、WISC‐Ⅳの検査結果があったので、その指標を見たところ、知覚推理の指標が高かったので、立体迷路をやらせてみました。通級指導教室に通っていた時にはやったことはなかったそうですが、１つのパズルをどんどんクリアしてしまい、こちらも驚きました。しかし、本人はクリアしてもその喜びを言葉や表情で表すことはありませんでした。場面緘黙という主訴を指導していくことはもちろん大切ですが、WISC‐Ⅳなどの検査結果からその子の強みも指導の中に取り入れながら指導内容を考えていくことも大切かと思いました。
・「何もしなくてすみません。」と焦り謝る保護者に予め小学校を話せる場所にしておく、話したいことが

ある場所にしておくことに意味があると思いました。

・また、その前にそのお子さんがどんなお子さんなのかを先入観や押しつけ感なく捉えられるように励みたいと思いました。

・場面緘黙の通級指導でどんなことをすれば理解していないことが多く、通級でどんな指導をして改善できるのか分からなかった。話さないのではなく、話せないのだということが講演を聞いて理解できたと思う。アセスメントの視点として、本人の思いや困っていることを知ることが大切だと思った。緘黙の状態が大人になった時に、引きこもりにつながってしまうことも知り、低年齢からの重要性を感じた。

・今回のご講演では、髙木先生が基礎からご丁寧にお話してくださり、経験が浅い私にとってとても分かりやすく、さらに勉強していこうという思いにさせていただきました。場面緘黙のある子供は「話さない」のではなく「話したくても話せない」状態であること、不適切な関わりによって青年期まで残り深刻な二次障害になるケースもあること、逆に適切な対応により改善するケースが多いことがわかり、私たち幼児言語教室でも適切な対応をさらに勉強していかなければと思いました。まずは、安心して過ごすことができる環境を作っていこうと思います。先生が紹介されていた書籍の中でまだ拝見していないものもあったので、また参考にさせていただこうと思いました。今回はありがとうございました。

・本日は貴重なお話ありがとうございました。事例をみると幼児期から発症する事が多い事を感じました。それまで母子で生活していた環境から大勢の同年代の子供達、初めて会う大人達（先生方）、家とは違う食事、トイレ。不安になるのも当然だと思います。その大切な時期に関われるので、正しい知識を持って対応していきたいと思います。

・幼児言語教室に勤務して１～２年に１人は緘黙のお子さんとの出会いがあります。お子さんによってその都度ケースが違うのでどう向き合っていこうか、毎回考えさせることがほとんどです。私が出会った方々はお子さんも保護者さんも「どう向き合ったらよいのだろう」と家族で向き合える方が多かった印象を受けています。もちろん最初は緘黙という言葉も知らないし、「どうしたらいい？」「どこに相談する？」等不安を抱え、悩んでいる方がほとんどです。私自身もどう向き合い、どう伝えていくのがいいか、試行錯誤しております。緘黙に関わらずですが、一人ひとりのケースの聞き取りや本人の意思（どうしたいのか）をしっかりつかんでいく大切さを改めて感じさせられました。その上での支援の仕方を考えていく「声を出さなくてもできるコミュニケーションの方法」をやっていくことも分かりました。幼児さんはまだ幼いですが、幼いなりに考えていること、伝えたいこともたくさんあります。お子さん＆保護者と信頼関係を築き、安心して話せる・表現できる場が提供できるように切磋琢磨していきたいと思います。ありがとうございました。

・場面緘黙の通級指導でどんなことをすれば理解していないことが多く、通級でどんな指導をして改善できるのか分からなかった。話さないのではなく、話せないのだということが講演を聞いて理解できたと思う。アセスメントの視点として、本人の思いや困っていることを知ることが大切だと思った。緘黙の状態が大人になった時に、引きこもりにつながってしまうことも知り、低年齢からの重要性を感じた。

・緘黙児のお子さんの学校における困り感、どう介入していくかを分かりやすく教えていただきました。幼児言語でも、そういうお子さんに出会った時、先を見通したかかわりができたらと思いました。エクスポージャーに取り組むのも子供との信頼関係を築いてから、その子の「話したい」気持ちを大切にすることが分かりました。

・幼児期のお子さんを担当したことがありましたが、自分の対応が正しいのかずっと不安でした。今回の研修で、教えていただいたことは、新しく担当になった時にとても参考になると思います。子供の様子をしっかり把握して対応することが大切だとよくわかりました。

・場面緘黙の背景に感覚過敏があったり、周りの音が気になってしまったりするのもあるとは思っていなかったので驚きました。そっと、しっかり子供の苦手に寄り添ってあげたいと思いました。

・講演を聞いて、緘黙の子どもについて正しく理解していなかった自分に気付いた。無理に話はさせず、安心して過ごせる環境を整えることが一番だと思い緘黙の子と接していた。緘黙の子と接する機会があったら「話す練習をする」ということも考えながら接していきたい。

・本人がやってみたいと思う目標を決めるには、本人の気持ちを聞かないと始まらず、聞く側が話さない子だからと決めつけないで、工夫をして聞くことが大事だと思いました。
・通級している幼児は、こちらの質問に対して答えられないときに、質問の意味がわからないのか、答え方がわからないのか、緊張しているのかわからないときがありますが、答えるのを待っていると、自分のことばで答えられることもあるので、相手にプレッシャーをあたえずに待つ姿勢や聞く姿勢も大切だと改めて思いました。（幼児ことばの教室担当）
・通常学級の担任時代は、場面緘黙の児童が学年に在籍していたり、または以前場面緘黙だった児童を担任したりしたことがあります。また、高木先生の講演のなかにも、500 人に１人は場面緘黙の児童がいるというお話がありました。しかし、通級指導教室を担当するようになり５年が経ちますが、場面緘黙の児童を担当したことはまだありません。きっと場面緘黙の児童・生徒のなかには、適切な支援が受けられず、苦しい思いをしていたり、ご家庭でも悩まれている保護者の方がいたりするのだろうと思うと、通級を担当している立場からすると、とても切ない思いがします。
高木先生のお話のなかで、場面緘黙症状をもつ子の抱える問題が話すことだけでなく、心理的身体的、行動面、家庭環境、生育歴など多岐にわたるということが幾つもあげられましたが、保護者や学級担任だけでなく、コーディネーターやスクールカウンセラーなど複数人で校内支援にあたるべきだと感じました。
場面緘黙だった児童を担任時代に、「６年生になったら話そうと思っていたんだ。」と言われたことがあり、その時は「そういうものなのか。」と不思議に思っていましたが、その子のそれまでの緘黙症状経験や抱えていた思いにもっと耳を傾けていればよかったと反省しています。（その子は６年生では友達と仲良くにこにこ話し、授業でも発表して活躍していました。）今後、困り感を抱える子どもに出会う時には、あらゆる側面からその子をみて、適切な支援を考えていきたいと思います。ありがとうございました。（学齢ことばの教室担当）
・その子が話せなくなっている状況や環境を含んだアセスメントをとっているかというと不十分だったので、そこを再度確認したいと思います。本人の思いや困っていることできるようになりたいことについても、本人と話し合ってみようと思いました。話すことには相手がいるということ、誰と話したいと思っているのかどうかなど、かなり基本的なところのアセスメントが足りていないと思い反省しました。保護者や担任とも、長期的な目標を考えていこうと思います。家（話せる場）と学校（話せない場）の中間の場がないとのお話が、非常に心に残りました。「母と学校で話す。」「友達と家で遊ぶ。」「担任の先生と二人だけで音読する。」など多くのヒントをいただいたので、今後検討していきたいと思います。来年度６年生になる子なので、不安レベルをはっきりさせ、自分でこういうときに話しにくい、こうすれば話せるなど、自分で自分のことを理解させていくような指導もしていけたらと思いました。
・「緘黙は、適切な対応により症状を改善できる」と聞いて、自分のこれまでの対応を反省しました。「無理に話さなくてもいい」という思い込みからの対応をとっていたからです。「話さないのは個性ではなく、個性を発揮できていない状態」ということばも胸にささりました。先生の話から、今までの自分にはない新しい視点を教えていただきました。
ありがとうございました。（発達通級担当）
・選択性の緘黙の指導や実態把握の仕方について情報があまり触れる機会がなかったですが、指導の理論や考え方がわかりやすく参考になりました。選択性緘黙児童への指導の不安が少し和らぎました。
・「本人」という言葉が多く聞かれ、選択制緘黙児における「本人の意思」がとても重要であることを改めて感じました。緘黙児には、家庭と連携の中で、本人の意思を確認することを念頭において、指導を進めていきたいです。
・発達通級で場面緘黙児を担当しています。１年目は、アセスメントと安心して通級できる環境や信頼関係づくりをと考えていました。高木先生のお話を伺って、一番大切な「本人の思いや困っていること、できるようになりたいこと」が抜けていたと気づきました。本人がどうしたいのか、改めてじっ

くりと話（筆談）をしようと思いました。
・場面緘黙が長期化したケース（朝日新聞の記事）のお話は、どこかでサポートにつながることができなかったのかと切なくなりました。しかし、通級で場面緘黙児童に関わる者として、では自分は適切な支援ができているのかと不安になりました。「話せなくても困らない支援」から「安心して話せるようになる支援」になるよう、本人と一緒に考えていきます。
・今まで、場面緘黙の児童に対して、困っていないから、いずれ自分が話したくなったら話せばいいと思っていました。話したいかどうかのアプローチをしなければいけなかったのかと今更ながらに悔やまれます。
・学校と家庭の中間になるような話せる環境を考えていきたいと思いました。
・場面緘黙の子どもに起こる様々な問題として挙げられていた、症状が軽視され、そもそも対応してもらえないという話が印象に残りました。「そのうち話すようになる」「勉強はできるから問題はない」という言葉はそのまま想像できてしまうくらい、自然にそんな話し合いは誕生してしまっているだろうなと感じました。本人の思いをきちんと聴きながら、一緒に改善していけるような手立ては身につけなければなと思いました。スライドの最後の方にあった「正しく理解するよう心がける」という項目は、場面緘黙の子だけでなく、心がけていかなければいけない場面がたくさん浮かびました。
・場面緘黙の深刻さを知ることができました。紹介してくださった『かんもくの声』も読み、ただ単に「話せること」に対応するだけでは的外れであることや当事者の苦しみを教えてもらいました。私たちが指導している子どもは、まだ幼くて何がどうなって今の自分の大変さが起きているのかを整理できません。かかわる大人がいろいろな可能性を考え、支援を見つけなくはならないとわかりました。
・高木先生のお話は、表れとしては場面緘黙ですが、通級している他の児童にも当てはまることが多く、通級担当者としての基本的な構えを全員が学ぶことができたと思います。ありがとうございました。
・通級指導に関わってきた中で３人の場面緘黙児に出会い、支援の難しさを実感している。
・高木先生のお話にあった「筆談」「選択解答」「話せる人」など本を参考に試してきたが、筆談やジェスチャーで意思疎通できる程度で終わってしまった。
・自校通級で週２～３回の支援をしてきた女児は、思いを丁寧に聞き取ってきたことによって、苦手だった音読を進んで練習できるようになった。また、算数の円の面積や分数の計算について自分から「教えてください。」と相談することもあった。
場面緘黙児の支援を経験して試行錯誤した中で、小さな成果が見られて良かったと感じている。
・「情緒障害の通級」ということで、通級で不登校の生徒の支援ができると、救われる生徒が増えるのではないか、と思いました。障害の判定がなくても、特性があり、本人保護者が通級を希望しているなら、通級対象とし、様々な支援を受けることによって生活しやすくなるケースがあるのではないか、と思います。現状としては、静岡市は不登校の数が多く、通級担当者の数が追い付かないかもしれない、ということが心配ではあります。
・通級生徒の在籍校にて、場面緘黙の生徒が、教師の問いかけに対してスムーズに答えず、トラブルになってしまった事例がありました。中学校では特に、担任だけでなく教科担任等も含め全職員で生徒の特性や対応について共有しておく必要がある、と強く感じました。個別の教育支援計画の活かし方も今後の課題であると感じています。
・「場面緘黙の子どもにとって過ごしやすい環境は、誰にとっても過ごしやすい」とのお言葉が、まさに特別支援教育の根幹だと感じました。発達障害の子たちへの支援を考える際にもよく言われるのが、彼らにとってわかりやすい授業、説明の仕方、プリントは、誰もがわかりやすい、と言います。極論を言えば、もっとユニバーサルデザイン化が進めば、彼らの困り感を最小限に抑えることができるのだと思います。「誰にとってもわかりやすく、過ごしやすい」という視点は、これからの学校教育には必要不可欠な考え方だと改めて思いました。
・場面緘黙や不安症などといった特性をもった生徒が今後増えてくると感じています。通級指導教室が、そのような子どもたちも救える場であると思うので、保護者との連携はもちろんのこと、医療機関や、

放課後デイとの連携も強化していかなければならないと感じました。
・場面緘黙児を担当していない通級担当でも、具体的な場面を想像できるほど、詳細で丁寧に示してくださっていた。
・場面緘黙症についての理解が深まった。無意識で圧をかけ、緊張につながることもあることなど、改めて自分の指導を振り返らなくてはと思った。また、それらに配慮し、安心できる環境を増やしていくことが大切な土台だと分かった。
・話せなくてもカウンセリングはできる。焦りから、時期草々なのではと、子どものせいにしていたと反省した。２時間をかけての丁寧な聞き取り、その質問や選択肢など、具体的な方法を教えていただき、今後の緘黙に対する方向性が見えた。
・自分が担当している緘黙の子の指導について、指導の方向性を考え直すことができた。現状の指導に手詰まり感があったため、具体的な方法を教えてくださり、とてもありがたかった。
・声を出して話すことにこだわらなくてもいいのではないかと思うこともあったが、本人の願いがあり、段階を踏んだ手順で指導を進めていけば改善するのならば、自分たちは適切な指導をして改善に向けて取り組んでいく必要がある。今までの指導を反省し、その子との関わりをより密にしていこうと思った。
・髙木先生が話してくださった中の、エクスポージャーを行う課題を１～５の数値で表して、３の「難しいけど、頑張ったらできる事」を決めてチャレンジするところに、とても納得できました。この考え方は、緘黙が主訴の子以外にも気にかけて指導に取り入れられる考え方かなと思いました。
場面緘黙の子どもの理解のためには、第一段階として心と体の元気を蓄える段階を大切にし、その後第二段階として話す練習に取り組む期間を設定していくということを聞き、この第一段階の課題がクリアしたことで、その後の指導がスムーズにいった過去の事例を思い出し、重要性を再認識した。
・支援と配慮を大切にしつつ、治療という視点をぶれずに持ち続けることを常に意識していきたい。
・子どもへの適切かつ段階的なエクスポージャーを設定することにより話せる場面を広げていくという髙木先生の実践を伺って、スモールステップで目標をもたせていく時に、無理はないか、課題は適切であるか丁寧に見ていくことを常に意識してリスクヘッジすることが大切なのだと感じた。
・場面緘黙症の子は、話さないのではなく、話したくても話せない状態であることや、困っているのに話せないという状態であるにもかかわらず、症状が軽視されやすいという問題があると知りました。それと同時に、そのような子が数多くいるのではないかと思いました。今一度、場面緘黙を巡る現状や場面緘黙症の理解が学校内でも進んでいくといいなと強く感じました。また、「場面緘黙の状態が個性ではなく、個性が発揮できない状態であり、安心できる環境なら自由に話すことができる、その姿が個性である」という点が印象に残りました。そこから、改めて多くの不安や恐怖などを抱えているからこそ、安心した環境づくりが必要であると感じました。さらに、場面緘黙の子へのアプローチとして、安心できる環境で心と体の元気を蓄える段階なのか、話す練習に取り組める段階なのかを考えることが大切であると学びました。アプローチを考える中で、常に本人にどんなことがやってみたいのか、どんなことならできそうなのかを確認しながら指導内容を考えていくことで、安心感につながっていくのだと思いました。学校で話すことが難しくても、関わりを大切にしながら指導を行っていくことで、通級指導教室が安心できる場だと感じることができたら、話せる第一歩になると思いました。
・場面緘黙を巡る状況について、「情緒障害」の定義が環境面、社会面、予防的な面の視点から具体的に「障害のある子供の教育支援の手引き」に示されたことを知りました。学校自身が場面緘黙について理解していないこと、不適応ではないと思って他機関につなげられないケースが非常に多いことについて、共感できたと同時に、教室で困っていないように見えるがために、あるいは緘黙児が担任を困らせていない、担任の配慮でなんとかやり過ごせるためにそのままにしてしまう緘黙児が数多くいると感じました。今一度、緘黙児がこのままの姿で良いのかを考える視点をもち、接していきたいと思いました。また、今日学んだことを現場にいる学校の先生方にも何らかの形で伝達できたらと思いま

した。
・通級指導教室で担当している児童について、緘黙症状についての詳細を整理すること、話すこと以外の問題（心理的・身体的な症状、行動面の症状）はあるか、外側にある問題（環境因子等）はあるか、本人の思いや願いは何かを把握していきたいと思います。本人の願いを把握する際は、時間をかけて丁寧に聴き取ることを心がけ、かかわりたいです。また、高木先生が紹介された「２段階のアプローチ」の考え方を活用できたらと思います。
・指導目標の立て方など参考になり、取り入れていきたいものがあった。A児は環境調整が必要であり、学校の活動の参加について配慮を行っていたが、より児童の状況に合わせて就学の場を変更することになった。B児は、保護者の励ましもあるが、指導室の中で次第に声が出せるようになり、いつもの決まった挨拶の言葉をいくつか言えるようになってきた。決まった言葉や絵の名称を言う、単語程度の文字を読むなど、言える言葉を増やしていくことを今後の目標にしようと思った。
・アセスメントが具体的でよくわかりました。
・緘黙についての世界の捉えが２０年前とは比べものにならないくらい、だいぶはっきりしてきたのだなと思いました。
・目標設定や段階があることはそうだよなと理解しつつ、自分はできていなかったよなと反省しました。
・本人の意見を聞く。どんな子でもそれは聞いてあげたいと思います。でも、信頼関係ができていないととても難しいです。うまくいく場合と、そこで終わってしまう場合を経験したことがあります。びくびくしてしまいます。
・全く話さない子とは出会ったことがないのですが、蚊の鳴くような声で単語だけで意思表示をするとか、筆談の選択肢の中で選ぶとか、待てばポソッとつぶやくとかの子には出会ったことがあります。その子たちも、母の後ろに隠れるとか　席はあえて後ろのはじっこの方がいいとか　視線を嫌う子達でした。　そういう子たちとの関係づくりは　先生がおっしゃるように　信頼関係つくり　ストレッサーと除去なのだと感じていました。今日のお話を聞いて、先生の理論のように　段階的に進めていけば、育っていくのだと知り、次にこういう子達に合った方法でアプローチしてみたいと思います。先生のご著書を読みたいと思いました。
・他の研修会で先生のご講演を聴いた時に、先生の YouTube チャンネルのご紹介があり、女児の配信チャレンジを拝見しました。　様々なタイプ様々なスモールステップがあると思うので、拝見していきたいと思っています。
・通常学級の担任の時、場面緘黙の子を受け持ちました。何をどうしていいのか分からず、引き継ぎにも具体的な支援内容は特になかったことを覚えています。一番大切にしたいのは、「本人はどうしたいのか？」というところ。話さなくてもいい環境を作るのではなく、本人のしたいこと（目標）にむけてどんなプランを立て、取り組んでいくのかが通級に求められる専門性かと思います。
・アセスメントや実践が具体的でとてもよく分かりました。
・場面緘黙の担当にならないとなかなか余裕がないですが、紹介された本も読んでみたいなと思いました。
・自分の受け持つ児童を頭に浮かべながら、講演を聞くことができ、大変有意義な時間を過ごすことができた。以前から、高木先生の書籍や YouTube の配信を拝見していたこともあり、自分自身の実践を振り返る良いきっかけとなった。本人の思いを引き出すのは「教師のコミュニケーション能力」という言葉が特に心に残った。目標とそれに向けた取組を「人」「場所」「活動」と組み合わせながら、本人と日々、試行錯誤しているが、先生の話を聞いて、「必要な時間・取組なのだ」と自信をもって今後、指導にあたれることが良かった。また同時に、目標に向けた取組をもう少し丁寧に考えていきたいと思った。別の機会があれば直接、高木先生の話をお聞きしたい。
・通級に通ってきている生徒の顔や様子を思い浮かべながら聞いていました。講演を聞き、信頼関係の大切さを実感しました。具体的で有効だと言われている指導方法も含め、その生徒との信頼関係とアセスメントを今後、大事に進めていこうと思います。

・場面緘黙の児童は、自分で選択して話すかどうか決めているのではなく、「本当は話したい！」と思っている児童がたくさんいるというお話が印象に残りました。問題行動が表出しにくい児童なので、症状が軽視され、対応してもらえないことも多いと聴き、私たち教員が児童の思いを受け止めて、手立てをとっていく必要があると思いました。
・場面緘黙の児童の背景に、構音障害や吃音が影響していることがあると伺い、言語通級指導者として、場面緘黙児童の実態を把握する必要があると思いました。
・以前担当した場面緘黙のお子さんは ASD もあわせもっていて、本人の希望を聞き出すことが難しく、目的を共有できないまま指導していました。私自身は楽しい場を家庭以外に作ることを目的としましたが、特別支援学級に入級したこともあって、それ以上の介入ができなくなってしまいました。自分の見通しがしっかりしていなかったために、保護者や担任と目的を共有できずにいたことが悔やまれます。
・先生のお話の中にもありましたが、場面緘黙に限らず、困り感を表出できない、気づかれにくい障害に対して、現状ではなかなか介入できていない状態です。早期発見早期介入を実現するためには、現場の私たちの意識向上も大切ですが、行政担当者の理解が必要だと感じています。
・場面緘黙の子供への支援は、特別支援教育の考え方そのものだと思いました。「話せない」という苦手な面だけを見るのではなく、どうして話せないのか、背景にある不安感に対応することが大切であると聞き、そう思いました。不安感に対応する方法が、大きく三つ示されていました。一つは、ユニバーサルデザインです。教室内に気になる音や物はないか、教員の話し方はどうかなど、落ち着いて過ごせる環境になっているか見直すことが必要です。場面緘黙の子供が安心して過ごせる教室環境は、他の全ての子供が過ごしやすい環境だと思いました。二つ目は、その子への個別の合理的配慮をすることです。担任として、その子に集団への参加を期待してしまうのはしょうがないことですが、それよりもその子が安心して過ごせる方が優先されるならば、他の子と全て同じ教育活動にするのではなく、個別の合理的配慮をすることが大切です。三つ目は、特別支援学級等を利用するなど、クラス以外の場を利用することです。私は、現在、発達通級を担当していますが、その子が何が苦手かという面を見るだけでなく、どうしてそれが苦手なのかその背景を見つめていきたいと思いました。
・場面緘黙の状態は「個性」ではなく、「個性が発揮できていない状態」ということが心に残りました。「話せる」「話せない」の中間に通級は位置付けて、個別指導を保護者と一緒に授業を行えば、話せる家族がいる（家庭に近い）状態も作れることも分かりました。場面緘黙の状態の子の思いをしっかり聴き取ることを大事にしていきます。
・現在、場面緘黙の生徒を扱っているため、私のための講演のようで大変にありがたかった。緘黙ネットの書物等で知識として多少はわかっていたが、説明を聞くと大変に理解がしやすかった。生徒との関係もできてきたところなので、参考にして次のステップに入っていきたい。改善プログラムの書籍も購入したいと思っている。
・場面緘黙について漠然とした知識（家では話せるけど、学校では話すことができない、等）しか無かったが、高木先生の講演を聴いて、場面緘黙について詳しく知ることができた。
・先生が冒頭に紹介された架空の事例のように、我々教員としては、クラスのなかでおとなしかったり、他の子と問題を起こさなかったりする子というのは、他の問題を起こす子に比べて軽視しがちであることが怖い。場面緘黙の症状はまさにその通りで、「問題がないから大丈夫」ということで本当に困っている子たちを見過ごさないようにしなければと反省した。
・先生が講演の中でたびたび強調されていたのは、「場面緘黙は治る」「本人の気持ちや希望をくみ取る」ということであった。本人にとって話しやすい環境面を重視する点は、吃音症状の対応に似ているが、「場面緘黙は治る」という信念を持って少しずつ取り組むことが大切だと感じた。また、その取り組みにも家と学校の中間地点を探ったり、保護者の意見を丸呑みにしないで本人の意見を尊重していったりするという姿勢は、他の発達障害の子や不登校の子にも通じる対応の仕方であり、これからの通

級指導教室での指導に生かしていきたいと考える。

・場面緘黙についての講演を聞くのは初めてでした。オンライン開催といえども、書籍などで情報を得るのとは違い、場面緘黙について多くのことが分かっただけでなく、頭の中で整理されたような感じを受けました。
・場面緘黙というと児童というイメージがありましたが、実際には幼児の段階から苦しんでいる子が多いということが分かり、少し驚きました。５００人に１名程度というと、実はことばの教室などに来ていない、見過ごされている子がまだまだいるのではないかと感じました。
・場面緘黙についてどういう支援が必要なのかということが具体的でよくわかりました。教室でも「話さないだけ」「様子をみる」という対応がされがちなのではないかと思いました。その子にきめ細かく関わるためには通級のような個別に対応できる場所が必要だし、社会生活を営んでいけるようになるには集団の中での配慮が必要になるため、もっと理解が広がるといいなと思いました。
・場面緘黙とは、どういうものでどんな問題が起こるかを初めて知りました。教室で密に辛い思いをしている子がいるのではないかと思いました。その子たちにどんなことができるのか、どういう接し方をしたらいいのかがとても具体的で参考になるお話でした。
・話ができなくてもどのようにコミュニケーションを取るのかを考え、その子の内面にある問題を見つけていくことが大切だと感じました。
・言語通級指導教室担当です。市内には、発達と言語の通級しかなく、緘黙のお子さんは、主訴が緘黙だと本校へ、緘黙もあるけれど、自閉もあるな、という子は発達の方へ振り分けられているようです。前任校では、自閉症・情緒学級に緘黙児が入級しましたが、そのときのことを振りけると、あくまでも自閉による不適応行動が主訴として挙げられ、医師の診断書もそちら寄りになっていました。緘黙のことは書いてなかったように記憶しています。しかし、6 年で入級したこの子は１年生からずっと学校では話していませんでした。
・情緒」の中に緘黙が入っていたのは知っていましたが、緘黙メインで就学支援委員会に上がる子を見たことがないのも事実です。緘黙の子には「なんらかの方法で意思表示できるように」、「緘黙児の在籍級へ配慮を求め、環境を整え」、そのうえで「可能なら言葉を引き出し・・・」と考えていましたが、今回の講演を拝聴して、こだまさんやのぞみさんの未来の姿にはっとさせられました。今担当している緘黙のお子さんは、家ではもちろん話していて、ことばの教室では、「音読」「絵を見て３語文程度で説明する」「クイズの答えを単語で口にする」ところまでは口にするようになってきています。でも私の中に、この子が学校でぺらぺら話している姿が想像できておらず、その姿を望めるとも正直思っていなかったのは事実です。だから、この先どう展開していったらいいのか行き詰まりを感じていました。今日講演を拝聴し、もっと先を目指してもいいんだ、話せるようになるんだ、と目からうろこが落ちました。また、緘黙のお子さんが練習やってみようかな、と思えるようになっていくカウンセリング冒頭のやりとりもとても参考になりました。
・幼児担当です。これまでに場面緘黙のお子さんの指導を何件か担当していました。はじめは、話せるようにと意気込み、空回りしていたことを思い出します。その子が、ことばに出さなくても安心出来る場、そして、私が安心できる人になれるよう心掛けてきました。保護者の理解も大切にしてきました。場面緘黙の研修がなかったため、とても勉強になりました。ありがとうございました。
・緘黙の児童が抱えている困り感に早く気付くこと、本人がどう感じているか、願っていることは何か、本人から教えてもらうことの大切さを感じました。緘黙のある児童が通級して１年ほどになりますが、

まずは安心安全な場所と時間と活動と担当者であることを重視してきました。関係はほぐれてきていると思うところもあります。本公演でいただいたことをヒントに、前進できるか試みたいと思います。ありがとうございました。

・場面緘黙児の未来について２種類の姿が示され、考えさせられた。
場面緘黙は適切な対応をすれば症状を改善できると知り、対応の仕方次第でその子の将来が変わりうるのであればその子に関わるものの責任は重いことだと思った。現在、わたしも家では良くしゃべるが家以外の場での発言はとても少ないという子を指導している。初めてのことに不安を感じている様子が見られるので、講演の内容を参考にして、スモールステップで少しずつ自信をつけさせていくように関わっていきたいと思った。

・以前、特別支援学級で場面緘黙の児童（自閉スペクトラム症の診断あり）を担任したときは、負担をかけてはいけないと思い、話す指導は行いませんでした。話せるようにしていくという視点で指導していくことが大事だとよく分かりました。

・初めて知ることが多くありました。話せるようになるまでの手順を細かく、分かりやすく説明していただき、今後の指導に生かしていきたいと思いました。場面緘黙の正しい知識を学校職員にも伝えたいと思います。

・本人を常に中心において支援する姿勢が大切だが、学級ではクラス運営が１番となり、個人に丁寧に対応するのが難しい場合が多いかもしれない。その際、通級が家とクラスの中間地点となり、安心して自分を出せる場所として機能することで、次のステップにつながるといい。

・以前関わった「話せない」子どもたちの顔を思い浮かべて聞いた。時間はかかったが、担当者（大人）が遊びの中で失敗したときに、声を出して笑ったり「違うよ」と突っ込んだりしたことが、話せるきっかけとなった。

・医療で「場面緘黙ではないか」と言われている子どもの指導が始まる。新人で知識も経験もなく不安に思っているところで、この講演を見ることができ良かった。幼児期という早期に対応することで、症状が改善できるよう努力していきたい。まず、その子のことを「よく知る」ことから始めたい。家庭・園との連携も大切にしたい。

・本人が、話したくても話せなくて困っていることを前提にして話す練習をしなくてはいけないことが分かった。

・子ども時代に見過ごされていても、大人になってからでも改善できると聞いて安心した。

・感覚の過敏さや不安症、知的能力等との関連も今後解明されるといい。

・適切な支援・指導を行うことで“場面緘黙は治る”という言葉は担当者にとっても保護者にとっても大変心強い言葉です。

・場面緘黙のお子さんを担当する機会は多くはないですが、通級指導教室においての具体的な支援・指導方法を学ぶことができて大変勉強になりました。「信頼関係を築き安心して過ごせる場所作り」・「話す練習」と通級ならではの可能な支援・指導なのだと改めて感じました。

・場面緘黙が医学的・法律上・学校教育では、それぞれ違った分類になっていることを初めて知り、大変驚きました。架空事例２例を挙げて話していただいたことで、様子を想像しながら聞くことができました。場面緘黙改善を目指すアプローチの段階「安心できる環境で、心と体の元気を蓄える」これは、吃音の子供の支援にも通じるものがあると思いました。カウンセリング時のコミュニケーション態度について、心がけておきたい内容が参考になり、いただいた資料を手元に置いて、何回も見返したいと思っています。

・現在、1 年男子を担当しています。家では話すが学校では一言も話しません。半年以上かけて、やっと担当者や通級教室の環境に慣れてきました。次は、本人の目標を明確にし、現状に合った課題を立てて実践していきたいと思いました。簡単ではないとは思いますが、担当している男の子は意思表示がはっきりできるので、本人のなりたい姿やそのための練習をゆっくりと一緒に考え、本人のやりたい意思を確認してやりやすいやり方で進めていきたいと思います。
・浜松市も情緒障害の通級は設置されておらず、LD 教室が学習障害と一緒に支援しています。高木先生のお話をお聞きし、やはり情緒障害と学習障害を分けて両方の通級教室があるといいなと思いました。誰もが健康で幸せな人生を送ることができるような社会の実現のために、声を上げにくい障害に対しても十分なケアが教育の場で行われることはとても大切だと思いました。
・適切な対応によって場面緘黙は改善できるということを高木先生にはっきりと言っていただいたので、とても心強く感じました。ご講演と改善プログラムの御著書を読み込んで、話せるための練習に取り組んでいこうと思います。
・社会一般に場面緘黙症の子どもの理解を得ることが現状では難しいなと思いました。まずは、今回の高木先生のご講演や著書を参考に校内の研修会などで先生方に伝え、深刻な状況になる前に予防的な支援をしていけるように学校全体で取り組んでいきたいと思いました。
・場面緘黙の子は、顕在化していないので、一見すると生活に適応しているように見えてしまう。しかし子供自身は困難であるということをふまえて接していきたいと感じました。
・症状を軽視し、「そのうち話せるようになる」という考えは絶対ダメであると改めて教えていただきました。長期化したケースを事例を聞き、二次障害が生じてしまうことを頭に入れて対応していく必要があると感じました。
・話せなくなるという言葉の問題だけでなく、行動の問題も見ていく全体を理解視点が大切だと思いました。
・社会モデルの視点で、「障害は、環境因子によって起こるので、心身の問題を取り除くだけでなく、環境を変えていく」というお話が心に残りました。環境を含めたアセスメントの大切さを学びました。
・「話せなくても困らないという環境では長期化させてしまう。適切な対応により症状が改善できる」というお話からも、安心感を持って話す練習をしていかなければならないと思いました。
・話せないという条件のもと、どのようにコミュニケーションを図ったりアセスメントをしたりしたらよいか困っていたが、具体的に示してくださり大変参考になった。特に学校と家庭の中間地点を作る、〈人〉〈場所〉〈活動〉の要素に分解し、組み合わせを意図的に替えるという方法は初めて耳にしたやり方であり、参考にしたいと思った。
・環境が大きく変わる（進級、就学など）時に変化が表れることを考慮し、適切な引き継ぎも大切だと感じた。
・「その子の思いをしっかりと聴き取ること」という言葉を忘れることなく指導していきたいと思います。そのために、私自身がすることは何だろうか、私に何ができるだろうかと考えています。一人一人に合わせた指導を目指すとしながら、実は指導する側に子供たちを合わせているのではないか。だから、時に子供の本当の困り感に気付かずに都合の良い解釈をするのではないかと思いました。具体的な例もあり、分かりやすくとても勉強になりました。ありがとうございました。
・たいへん分かりやすくお話してくださり、勉強になりました。以前、ことばの教室内で自分と話せるようになることを望んでいたことを反省しました。その子自身が何を望んでいるか把握していきたいと思います。ありがとうございました。

・「特に困ることなく生活できる」で済まさずに、本人の要望をしっかり聞いて、それに向かう挑戦のステップとタイミングをしっかりと見極めることが大事だと思いました。本人の力を発揮し可能性を広げるために、「安心して過ごすことができる」の次の話す指導の必要性を教えていただきありがとうございました。

・３年男児。不安レベルの行動をいろいろ聞いて、少しでも不安を取り除けるように家庭、学校と連携した結果、今はストレスが少なくなってきた。先生の動画を拝聴してから、話す練習を始めてもよいと判断し、だれと話したいか、それまでどのように進めるか決めて、始めてみた。通級でも話すことができず、筆談をしているが、話をしたいと強く望んでいる。話す練習を進めながら、児童の気持ちに寄り添っていきたい。

・繊細な心のお子さんがいることや、その子へどう接していけばよいかを考えることができました。話すことは多少なりとも自分の心を開かないとできないことで、それが難しい子がいることや、でも伝えることができないもどかしさをかかえてなお声にだすことができない葛藤を感じている子がいることがわかりました。１回１回焦らず、丁寧に、状況を設定して、かかわっていくことが求められることがわかりました。話せなくてもカウンセリングできるとの説明も参考になりました。時間をかけ、相手を見ないで、相手のペースに合わせることが大切だとわかりました。

・コミュニケーションを進めるうえで、正しい見取りをすることの難しさも感じました。その子に会った適切なかかわりになっているか、判断できているか、投げ掛けができているか、教師の側の力量も問われるところだと思いました。

・細かい実態の把握、見立て、本人との信頼関係を築くことの大切さを感じました。後半の具体的な指導方法や教材が大変参考になりました。

・架空の事例をもとに、考えられる様々な課題について分かりやすく説明をしてくださいました。どのような視点でアセスメントを取るかが分かったので実践したいと思います。本人がどう思っているかを大切にしたいです。

・現在、通級言語指導教室で場面緘黙の児童３名（２名は通級指導教室では話せるが在籍学級では話すことができない・１名は家庭でのみ話せる）を指導しています。

先生の「話さない」のではなく「話したくても話せない」状態であること、話さないと大変困ること、本人も困難さを感じていること、不適切な関りによって二次障害を引き起こすことになる等の場面緘黙の子供に起こる様々な問題について伺うことで、自分の場面緘黙への理解が不十分であったと痛感しました。

また、学校でのアプローチも、話すことができなくても、安心して過ごすことができる環境（通級指導教室・在籍学級）を作るという環境調整のみを優先していました。通級指導教室で話す練習（選択肢を指差す・筆談を含む）と在籍学級の担任と話す練習（選択肢を指差す・筆談・電話で話すを含む）を行うのみでした。先生が紹介してくださった「話す練習」を進める手順のように、スモールステップの段階を踏まえて行うべきだったと反省しています。

これからは、本人と相談しながら、目標を明確にし、エクスポージャーを行う課題を人・場所・活動の３つの組み合わせを考えながら、PDCA サイクルの理論に基づく「話す練習」を実践していきたいと思います。また、本人に確認しながら、時間を掛けて丁寧に、答えやすい質問の仕方を工夫していきたいと思います。

最後に「話せなくても、思っていることや考えていることはたくさんある」という言葉を心にとめながら、話せる子供以上に、場面緘黙の子供の思いを丁寧に聴き取り、きめ細かな対応をしていきたい

と強く思いました。そのためにも、先生の著書「子どもの場面緘黙サポートガイド」「学校における場面緘黙への対応」を読み返すとともに、「場面緘黙改善プログラム」を購入して熟読したいと思います。

・場面緘黙の子の支援の仕方が大変分かりやすく説明してくださって参考になった。自然にまかせるのでなく、将来のことを考えて、すこしずつでも話ができるようになるようなアプローチをしていくことが大切であると感じた。

・不安の強い子供は、見通しをもたせることが大切ということは、発達に問題のある子ども全体にも通じることだと思った。今後の支援の参考にしていきたいと思う。

・本人、保護者、支援者で合意の上でエクスポージャー法を取り入れることが大切だと分かりました。「どのような場面で誰と会話できる場面」を増やしていくのかを話せる人間関係が必要だと感じました。

・いろいろなエクスポージャー場面をその子の実態に合わせて丁寧に行っていく力量が必要だと思いました。この方法の中心を、ことばの教室担当が担えるのか不安にも思います。

・本人の意欲と、適切な難易度の目標設定を本人に確認しながらすることはとても大事なことだと思いました。緘黙の子に限らず、通級する子全員に必要なことだと思いました。ただ、目標設定や課題を考えるのは難しいと思いました。例えば、協力者の意向(担任にこちらのしたいことを理解してもらう工夫等)との調整、スモールステップを設定するにあたって私達通級担当の想像力やセンスが問われるのかなと思いました。がんばります。

・来年度、言語の教室に、緘黙だけど、発音を直したいと言う子が入級予定です。指導への不安がありますが、先生のお話を聞いて、勇気をいただきました。丁寧に指導していこうと思います。

・「どきどき不安きんちょう度チェックシート」は緘黙の子の改善に必要だと思いました。通常学級に在籍する緘黙の児童について担任が困っていたので、紹介したいと思いました。担任と本児と保護者がこのシートを介して現状を共通理解し、来年度の目標を持つことができそうです。

・話したくなる雰囲気作り、会話の楽しさを伝えられるようになりたいと思いました。